

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：24405

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03154

研究課題名（和文）カリキュラム・マネジメントの意識化を促す校内研修ワークブックの開発

研究課題名（英文）Development of a school-based teacher education workbook to promote awareness of curriculum management

研究代表者

島田 希（Nozomi, Shimada）

大阪公立大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：40506713

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではカリキュラム・マネジメントの意識化を意図した校内研修の好事例を収集・分析してきた。より具体的には、校内研修の企画・運営におけるミドルリーダーの工夫について参与観察やインタビューを通じて明らかにした。例えば、ミドルリーダーは、教育課程編成方針を明確化・重点化するとともに、それを校内研修で活用する「物」に反映させ、意識化を図ろうとしていた。具体的には、教科・領域横断的な単元づくりについて記述する欄を学習指導案に設けるといった工夫である。以上の知見をふまえつつ、カリキュラム・マネジメントの意識化を促すことを意図した校内研修の企画・運営上の工夫について構想するためのワークブックを開発した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、第一に、カリキュラムという視点をもつ校内研修に関する先行知見と焦点化することで、その到達点と課題を明らかにしたことが挙げられる。次に、カリキュラム・マネジメントの意識化を促す校内研修の企画・運営におけるミドルリーダーの役割を観察やインタビューにもとづいて明らかにしたことを挙げることができる。こうした知見をワークブックという形式にまとめた。ワークブックは、解説を読むだけでなく、各自の学校の取り組みを構想するためのワークシートも収録されており、教師たちが活用可能なツールを開発したという点に社会的意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study has collected and analyzed good practices of school-based teacher education intended to raise awareness of curriculum management. More specifically, the role of middle leaders in planning and organizing school-based teacher education was clarified through participant observation and interviews. For example, middle leaders were trying to clarify and emphasize the curricular policy and reflect it in the 'tool' used in the school-based teacher education, in order to raise awareness of it. Specifically, they devised a column in the teaching plan to describe cross-curricular and cross-disciplinary unit development. Based on the above findings, a workbook was developed to conceptualize the planning and management of school-based teacher education with the intention of promoting awareness of curriculum management.

研究分野：カリキュラム研究、教育工学研究、教師教育研究

キーワード：カリキュラム・マネジメント 校内研修 ミドルリーダー ワークブック

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、カリキュラム・マネジメントの意識化を促す「校内研修ワークブック」を開発することを目的とするものである。

まず、研究開始当初の背景として、「小学校学習指導要領(平成29年告示)」等において、「各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントを行うよう努めるものとする」と示されており、「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説総則編」では、こうした取り組みについて「校内研修等を通じて研究を重ねていくこと」の重要性が述べられているという点が挙げられる。

校内研修の中心をなすのは、「授業研究」と呼ばれる営みであり、わが国においては、長年にわたり、その取り組みが蓄積されてきた。しかしながら、安彦(2009)は、「日頃の授業研究が学校のカリキュラム全体を改善したり、改善に役立つ授業研究として活用されているかといえば、そういう例はまれである」(p.18)とその課題を指摘している。さらに、安彦(2009)は、その理由として、「授業研究が一時間単位で行われてきたことによるところが大きい」(pp.18-19)と指摘し、「今後の『授業研究』は、『カリキュラム研究』との関係をどうするのか(中略)直接に『カリキュラム』を改善するような授業研究も必要」(p.19)であると述べている。つまり、カリキュラムという観点をふまえた授業研究に関する研究は、これまでのところ十分に蓄積されておらず、カリキュラム・マネジメントと授業研究、校内研修との接点を築くことは急務の課題である。

次に、上記のような背景をふまえた上で、授業研究(校内研修)においてカリキュラム・マネジメントを実践するためには、意図的なマネジメントあるいはツールが必要であることが指摘されてきたという点を挙げるができる。例えば、田村(2006)は、ある学校における校内研修プログラム(4回分)を開発し、カリキュラム・マネジメントへの意識化に関わる効果を検証している。また、小柳ほか(2018)は、子どもの中長期的なエビデンスを蓄積しうる e-ポートフォリオをツールとして用いて、カリキュラム・マネジメントにおける活用可能性を検討している。このように、校内研修とカリキュラム・マネジメントの接点を築くことを促す実践的あるいは開発的な研究にもとづいて、いくつかの知見が示されてきたが、そのさらなる蓄積を要すると考えた。

2. 研究の目的

以上のような背景をふまえ、カリキュラム・マネジメントの意識化を促す「校内研修ワークブック」を開発することを本研究の目的として定めた。この目的を達成するために、さらに、3つの下位目的を設定し、本研究を通じて、これらを明らかにすることを目指した。

カリキュラム・マネジメントの意識化を意図した校内研修の企画・運営に関わる好事例において、校長や研修主任はいかなる工夫を講じているのか。

校内研修において、カリキュラム・マネジメントの意識化を促進する要因は何か。

上記 ~ で導き出された知見をふまえ、カリキュラム・マネジメントの意識化を促すために、どのような「校内研修ワークブック」を開発すべきか。

なお、本研究においては、授業研究は校内研修の支柱として位置づくが、それは研究テーマの設定や年間の活動計画の策定等と関連させて企画・運営されることで、その可能性を最大限に引き出すことができる(木原 2009)という指摘をふまえている。ゆえに、授業研究や関連する諸活動を含む校内研修全体の企画・運営を通じて、カリキュラム・マネジメントの意識化をいかに促すことができるか、そのためのツールとして求められる内容を検討・開発することとした。

3. 研究の方法

(1) 先行研究のレビュー

先述の研究の背景をふまえた上で、カリキュラムあるいはカリキュラム・マネジメントとの接点をもつ校内研修について、先行研究の到達点と課題を明らかにするために、レビューを行った。具体的には、CiNii Article(以下、CiNii)において、「校内研修×カリキュラム」等をタイトルに含む学術論文を検索・選定し、計38件の先行研究をレビューした。

(2) カリキュラム・マネジメントの意識化を意図した校内研修の好事例の収集・分析

カリキュラム・マネジメントの意識化を意図した校内研修の企画・運営に関わる好事例を収集した。具体的には、そこでの研究主任等の工夫を明らかにするために、複数の地域の小学校等で校内研修の参与観察とインタビューを実施した。さらに、複数校のインタビュー等から得たデータをもとに、その共通点を導出した。上記の国内におけるデータ収集に加えて、英国の複数の小学校においても、カリキュラム改善のための校内研修等の参与観察やシニア・リーダーシップ・チームを対象としたインタビューを実施した。

(3) 上記(1)(2)の視点をふまえた「校内研修ワークブック」の開発

先述の(1)および(2)から導き出された知見をもとに、「校内研修ワークブック」を開発した。そのプロセスにおいて、カリキュラムや校内研修についての専門的知見を観点とするフィー

ドバックを受け、それにもとづく加筆・修正を行った。

なお、本研究の当初計画では、初年度より校内研修の参与観察やインタビューを複数の地域で実施する予定としていた。しかしながら、新型コロナウイルス感染症の拡大により、計画の再検討を余儀なくされたことも記しておく。

4. 研究成果

(1) 先行研究レビューの結果

先述の38件の先行研究レビューを行った結果、以下の4点が確認された(島田・木原 2023a)。
全体として、カリキュラムの視点にもとづく授業研究に関する学術的研究が十分に蓄積されているとは言い難い状況である。
学習指導要領の改訂と呼応するように、カリキュラム・マネジメントをテーマとする研究が増えることから、教育施策の影響を強く受けている。
フィールドワーク等にもとづく研究が多く、実践との距離感の近さを特徴としている。
一方、カリキュラムの定義や前提を問い直す研究との接点が見いだされなかったこともふまえると、カリキュラムの視点にもとづく授業研究についての学術的研究は、やや事例的、近視眼的な傾向にある。

(2) カリキュラム・マネジメントの意識化を意図した校内研修の好事例にみられる特徴

カリキュラム・マネジメントの意識化を意図した校内研修の企画・運営についてミドルリーダーが以下5点のような工夫を講じていることが確認された(島田・木原 2023b)。
ミドルリーダーが根づかせたいと考える、あるいは、重要視している学校文化・個人的価値観を校内研修企画・運営上の方策として具現化させていた。
教育課程編成方針を明確化・重点化するとともに、それを校内研修で活用する「物」に反映させ、意識化を図ろうとしていた。
評価 - 改善 - 計画の連続・発展を実現するための活動を校内研修に埋め込んでいた。
実践に資する情報提供・共有化を図っていた。
研究(研修)の楽しさやチャレンジ、創意工夫を尊重・後押しする学校文化を創出するために、ポジティブな雰囲気醸成しようとしていた。

(3) 「校内研修ワークブック」の開発

以上(1)および(2)の研究成果をふまえ、カリキュラム・マネジメントの意識化を意図した校内研修の企画・運営のためのワークブックを開発した。

主には、上記の好事例において確認されたことをもとに、ミドルリーダーが根づかせたいと考える、あるいは、重要視している学校文化・個人的価値観を明確化すること、教育課程編成方針を明確化・重点化すること、評価 - 改善 - 計画の連続・発展を実現すること、実践に資する情報提供・共有化すること、カリキュラム・マネジメントを意図した校内研修に対するポジティブな雰囲気を醸成すること等について、その必要性や求められる工夫について解説するとともに、その具現化のためのワークシートを収録した。

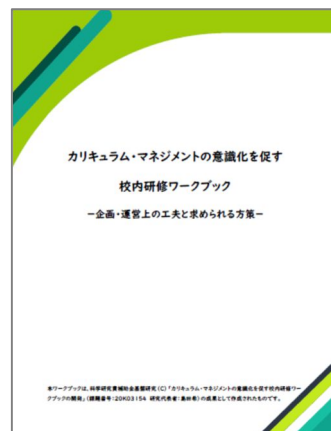


図1 開発したワークブック

<引用文献>

- 安彦忠彦(2009)「第1章カリキュラム研究と授業研究」日本教育方法学会編『日本の授業研究—Lesson Study in Japan—授業研究の方法と形態 下巻』学文社, pp.11-20.
- 木原俊行(2009)「授業研究を基礎とした学校づくり」『日本の授業研究 - Lesson Study in Japan - 授業研究の方法と形態<下巻>』学文社, pp.127-135.
- 小柳和喜雄・真弓英彦・田代伸一・宇野剛・乃一志保(2018)「e-ポートフォリオを活用した授業研究に関する研究:カリキュラム・マネジメントへの意識化を促す教職大学院のプログラム開発」『教育メディア研究』24(2), pp.29-42.
- 島田希・木原俊行(2023a)「カリキュラムの視点にもとづく授業研究に関する研究動向」大阪公立大学教育学会『教育学論集』2(通号49[12]), pp.13-23.
- 島田希・木原俊行(2023b)「カリキュラム・マネジメントの意識化を促す校内研修の方策とその特徴 - ミドルリーダーによるアプローチは教師のエージェンシーをいかに高めるか - 」日本カリキュラム学会第34回大阪教育大学大会自由研究発表 -4 当日発表資料.
- 田村知子(2006)「カリキュラムマネジメントへの参画意識を促進する校内研修の事例研究」『カリキュラム研究』15, pp.57-70.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 島田希、木原俊行	4. 巻 第2号(通号49号〔12号〕)
2. 論文標題 カリキュラムの視点にもとづく授業研究に関する研究動向	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪公立大学教育学会『教育学論集』	6. 最初と最後の頁 13-23
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行、島田希	4. 巻 72
2. 論文標題 授業研究の学術的研究の動向に関する考察-1990年から2021年に学術雑誌に掲載された論文のタイトルのテキストマイニングを通じて-	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要『総合教育科学』	6. 最初と最後の頁 35-47
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行	4. 巻 598
2. 論文標題 学校としてカリキュラム・マネジメントに取り組む	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 教職研修	6. 最初と最後の頁 25-27
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行	4. 巻 63(5)
2. 論文標題 新人教員支援の展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 看護教育	6. 最初と最後の頁 570-575
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行、長谷川元洋、山本朋弘、中橋雄、今野貴之、 関戸康友	4. 巻 45巻Suppl.
2. 論文標題 学校における実践研究に対するオンラインコンサルテーション	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会論文誌	6. 最初と最後の頁 105-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15077/jjet.S45056	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木原俊行	4. 巻 70(8)
2. 論文標題 組織力の向上と人材育成を推進する学校経営 - 経営参画意識の高揚と指導力の向上を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 小学校時報	6. 最初と最後の頁 4-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 島田希、木原俊行
2. 発表標題 カリキュラム・マネジメントの意識化を促す校内研修の方策とその特徴 - ミドルリーダーによるアプローチは教師のエージェンシーをいかに高めるか -
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第 34 回大阪教育大学大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 島田希、木原俊行
2. 発表標題 カリキュラムの視点にもとづく授業研究に関する学術的動向
3. 学会等名 日本カリキュラム学会第 33 回名古屋大学 web 大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 木原俊行、島田希
2. 発表標題 授業研究の研究動向に関する考察 - 1990年から2021年に学術雑誌に掲載された論文のレビューから -
3. 学会等名 日本教育方法学会第58回大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 子安潤、石井英真、鹿毛雅治、奥村好美、田端健人、木原俊行ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 図書文化社	5. 総ページ数 181
3. 書名 教師教育改革の動向と教師の自律性	

1. 著者名 木原俊行、馬野範雄、島田希ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 あいり出版	5. 総ページ数 274
3. 書名 生活科/総合的な学習の時間の理論と実践	

1. 著者名 深見俊宗、島田希、木原俊行、廣瀬真琴	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北大路書房	5. 総ページ数 144
3. 書名 教師のレジリエンスを高めるフレームワーク	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	木原 俊行 (Kihara Toshiyuki) (40231287)	大阪教育大学・連合教職実践研究科・教授 (14403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関